今古奇觀

上

I242.3
J2-1

412
507

I242.3

日文 701597552
100444

中国古典文学大系 37

今古奇観 上

抱甕老人 編

千田九一・駒田信二 訳

藏書
京都大学
85012527
図書

平凡社

訳者紹介

千田九一（ちだ くいち）　1912年山口県生。1965年没。東京大学文学部支那文学科卒。専攻　中国文学。元東京都立大学講師・京華高等学校教諭。訳著書「巣の中の蜘蛛」（宝雲舎）「東海巴山集」（岩波書店）「金瓶梅」（小野忍共訳，平凡社）

駒田信二（こまだしんじ）　1914年三重県生。東京大学文学部卒。専攻　中国文学。主著「石の夜」（角川書店）「新墨子物語」（河出書房）「水滸伝」（平凡社）「対の思想」（勁草書房）「島」（筑摩書房）

中国古典文学大系　全60巻

今古奇観（上）　第37巻

1970年9月5日　初版第1刷発行
1984年12月15日　初版第9刷発行

訳者　千田九一
駒田信二

東京都千代田区三番町5番地
発行者　下中邦彦

発行所　郵便番号　102
東京都千代田区
三番町5番地
振替・東京8-29639
株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1970　Printed in Japan

目　次

第一話　三孝廉　産を譲って高名を立つること……三
第二話　両県令　義を競って孤女を婚がしむること……一五
第三話　滕大尹　鬼によって家私を断くること……三一
第四話　裴晋公　義によって原配に還すること……四九
第五話　杜十娘　怒って百宝の箱を沈むること……六〇
第六話　李謫仙　酔って嚇蛮書を草すること……七七
第七話　売油郎　花魁を独占めにすること……九二
第八話　灌園叟　晩に仙女に逢うこと……一二九
第九話　転運漢　巧く洞庭紅に遇うこと……一五二
第十話　看財奴　寃家主を刁して買うこと……一七三
第十一話　呉保安　家を棄てて友を贖うこと……一九〇
第十二話　羊角哀　命を捨てて交わりを全うすること……二〇五
第十三話　沈小霞　出師の表と相会うこと……二二一
第十四話　宋金郎　破氈笠に団円すること……二四二
第十五話　盧太学　詩酒もて公侯に傲ること……二六三
第十六話　李汧公　窮邸にて侠客に遇うこと……二九二
第十七話　蘇小妹　三たび新郎を難しむること……三一〇
第十八話　劉元普　貴子を双生すること……三三三
第十九話　兪伯牙　琴を摔いて知音に謝すること……三六〇
第二十話　荘子休　盆を鼓いて大道を成すこと……三七二
第二十一話　老門生　三世に恩を報いること……三八三
第二十二話　鈍秀才　一朝にして交泰らぐこと……三九四
解　説……四〇七

今古奇観

上

駒千抱
田田甕
信九老
二一人
訳　編

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一話

三孝廉　産を譲って
高名を立つること

紫荊の枝下　家に還るの日
花萼の楼中　被を合するの時
気を同じくするは従来兄と弟
千秋詠ずるを羞めん豆萁の詩

この詩は、兄弟は仲よくするようにと作られたもので、中に三つの故事が用いてある。では次に一つ一つ説明することにしよう。

第一句に、「紫荊の枝下、家に還るの日」とある。

むかし、田という家に三人の兄弟があり、小さいときからみなでいっしょに暮らしていた。長男の嫁は田大嫂、次男の嫁は田二嫂といって、嫁同士も仲むつまじく、何のいざこざも起こらなかった。ただ三番目はまだ若かったので、兄や嫂たちにたよって日を送っていたが、これもその後成長して嫁をもらい、この嫁を田三嫂といった。

この田三嫂というのが出来がわるく、すこしばかりの嫁入り道具を鼻にかけ、一家の者が同じ釜で飯をたき、同じ卓で食事をしているのを見ながら、自分の身銭は出そうとせず、自分の物には手をつけず、何とか自分たちだけで食べたいものだと思ったが、それも都合がわるく、いつも亭主の尻をつっついていた。

「お家の金庫や田畑は、みんなお兄さんたちが握っていらっしゃって、出すのも入れるのも、あんたはまるきりご存じない。あちらはまっ昼間であんたは暗闇、一を十といわれようと、十を百といわれようと、てんでわかりゃしない。今はいっしょに住んでるといったって、どのみちいつかはばらばらになるんだわ。もし家が左前になって来でもしたら、年の若いあんたがひどい目にあうだけよ。わるいことはいわないから、早いとこみんなと別れて、財産を三つに山分けし、めいめいでやっていくに限るわ。どう?」

田三はつい女房の言葉に惑わされて、それもそうだと思いこみ、親戚にたのんで分家したい旨を兄たちに話してもらった。田大と田二は、最初のうちは承知しなかったが、田三夫婦に内と外からしきりに迫られて、仕方なく承諾し、家屋から銭・穀物に至るまで、ありったけのものを三つに山分けして、すこしもむらのないようにした。ところが庭に一本、紫荊（蘇芳）の大樹があり、これは先祖代々伝わってきたもので、盛んに枝葉を茂らせていた。別居するとなると、この樹はいったい誰のものか。しかも今や花盛りの時期、惜しいというも愚かなことであるが、田大は至って公平無私、この樹を伐り倒した上、太いところは三つに切り分けてめいめいその一つを取り、残りの細かい枝や葉は秤にかけて分けてはと話を持ち出した。相談がまとまると、さっそく明日取りかかることになった。

翌日、夜が明けると、田大は二人の弟を呼んでいっしょに樹を伐りにいった。ところが樹のところまでいってみると、枝は枯れ葉はしぼんで、まるで生気がない。田大が手でひと押しすると、樹はそのまま倒れて、根っこまでむき出しになってしまった。田大は手をおくと、樹に向かっておいおい泣き出した。二人の弟が、

「この樹に何の値打ちがあるというんです。兄さんそんなに惜しがることはないでしょう」

というと、田大は、

「俺はこの樹のことで泣いてるんじゃない。考えてみると、われわれ兄弟三人は、同じ家に生まれ、お父さんお母さんも同じで、ちょうどこの樹の枝や葉が、同じ根から生えていて、分けられないようなものなんだ。根から幹が出、幹から枝が出、枝から葉が出て、だからこそ生い茂っているのだ。昨日、この樹を三つに分ける相談をしたものだから、樹は生きながら別れ別れになるのに忍びず、ひと晩のうちに自分で枯れ死んでしまったのだ。われわれ兄弟三人も、もし別れ別れになったりしたら、やっぱりこの樹と同じように枯れ死んでしまって、栄えるときなんかありっこないよ。それを俺は悲しんでいるんだ」

田二と田三は、兄の言葉を聞いてすっかり感動し、人間でありながら樹におよばなくていいものかと、みんなでしかと抱きあったままはげしく泣きつづけた。誰も分家するに忍びず、今までどおりいっしょに暮らしたいと願うのであった。

三人の女房たちは、家の前で泣き声がするので、出て見てはじめてそのわけを知った。大嫂と二嫂はいずれも喜んだが、三嫂だけはおもしろくない。ぶつぶつ怨みごとをいっている。田三は女房を追い出そうとしたが、二人の兄からしきりになだめられて思いとどまった。三嫂は恥ずかしくなって、部屋に戻ると首をくくって死んでしまった。これすなわち自業自得というものであるが、そのことはここではおくことにする。

ところで田大は、例の紫荊の樹が惜しくて、もう一度見にいったところ、誰が手を入れたわけでもないのに樹は自然にしゃんとなり、枯れた枝は生き返り、しぼんだ花も活気づいて、前よりいっそう咲きみだれている。田大は二人の弟を呼んでそれを見せたが、誰も不思議でならなかった。これより以後、田家では代々住居をともにしている。

詩をもって証とするならば、

紫荊の花下に三田を説く
人は合し人は離る　花も亦然り
同気連枝は原より解けず
家中聴くこと莫かれ婦人の言を

第二句には、「花萼の楼中、被を合するの時」とある。

この花萼楼というのは陝西は長安城の中にあって、大唐の玄宗皇帝が建てられたもの。玄宗皇帝とはつまり唐の明皇のことで、もともと唐の宗室であるが、韋氏の乱政、武三思の専権(注一)のために、明皇は兵を挙げてこれらを誅し、ついに帝位につかれたのである。この明皇に弟が五人あり、みな王爵を贈られていたので、時の人は、これを「五王」と呼んだ。明皇は友愛の情の厚い方で、大きな楼を建てて、これに『詩経』の「棠棣」の意味を取って「花萼」と名づけ(注二)、よく五王を招いてはこの楼で楽しい宴を催された。また大きな幔幕をつくって、これを「五王帳」と名づけ、帳の中の長枕や大被に、五王とともに寝るのを常とされた。次にその証の詩を引こう。

羯鼓頻りに敲って玉笛催し
朱楼宴罷んで夕陽微かなり
宮人燭を秉りて通宵坐し
君王の夜帰らざるに信せず

第四句には、「千秋詠ずるを羞めん豆萁の詩」とある。

後漢の魏王曹操の長子曹丕は、漢の皇位を簒奪して帝と称した。弟

に曹植というのがあって、字は子建、その聡明さは天下に並びなく、曹操は日ごろから非常にこれを鍾愛して、いくどとなく跡つぎに立てようとしたが、はたさなかった。曹丕はそれをいつまでも恨みに思い、何か事あらば殺さんものと企んでいた。ある日、子建を呼んでこうたずねた。

「先帝には、お前の詩才の機敏なことをいつも誇りにしておられたが、朕はまだ直接には試したことがない。今、ここで七歩歩くうちに詩を一首つくってみよ。もしできぬ時には、お前を騙りとして罰するぞ」

子建が七歩と歩まぬうちに、詩はできてしまったが、それには諷刺がこめられてあった。

豆を煮るに豆萁を燃やす
豆は釜中に在りて泣く
本是れ同根より生ぜしに
相煎ること何ぞ太だ急なる

曹丕はこの詩を見て感泣し、ついにこれまでの恨みをほぐしてしまった。後の人がこれを詠んだ詩に、

従来寵貴は猜疑を起こす
七歩の詩成るも亦危かるべし
嘆ずるに堪えたり釜萁の仇未だ已まず
六朝の骨肉 尽く夷を誅す

わたくしが、なぜ今日こうした二、三の物語を申し上げたかというと、それは、かの三孝廉が財産を譲りあって名を揚げた話をいたそうがためにほかならない。この話は曹丕の虐待ともちがい、また子建のような風流はないにしても、紫荊の花のもとの田家三兄弟や、花萼楼の中の唐の王室李の兄弟たちにも勝っていて、たとえ仲のわるい兄弟衆でも、これから説き出す物語をお聞きになったら、きっとこれを手本にしようという気になられるにちがいない。これぞまさに、

天下の事を知らんと要せば
須らく古人の書を読むべし

この物語は東漢の明帝の御代のことである。そのころは天下は太平無事で、万民は業を楽しみ、朝に梧鳳の鳴あり、野に谷駒の嘆なし[注三]というありさまであった。元来、漢朝の官吏採用法は近ごろとちがって、科挙の試験によるのではなく、ただ州や郡の推薦によったもので、「博学宏詞」とか「賢良方正」とかの科目制度はあるにはあっても、何よりも「孝廉」に重点をおいた。孝とは孝悌、廉とは廉潔、孝ならば君にも忠であるし、廉ならば民を愛するというわけで、ただ孝廉に推挙されただけで、役人になることができた。これが当今のような情勢だと、州や県の学校の童生の試験にさえ、何千通という推薦状がくるのだから、孝廉を推挙するということにでもなった日には、どれだけの情実がからむかも知れず、うまくもぐり込むのは相変わらず金持や貴族の子弟で、貧乏人ではたとえ曾子（孔子の弟子）のような孝、伯夷[注四]のような廉の持主がいたとしても、名前を揚げることなど思いもよらぬ。

ところが、漢朝の法制はまことにうまくできていて、もし誰かが孝廉に挙げられた場合、その人が本当に才や徳をそなえておれば、たとえ資格がどうであろうと、どんどん抜擢され、推薦したものまでが記

録にとどめられて恩賞にあずかる。仮りにもし、推薦されたのが不適当な人で、後日金をむさぼったり法をまげたりしたならば、軽くても免職、重ければ財産没収、推挙したものまでが同様の罪を受ける。推薦する人と推薦される人とが運命をともにして決していい加減なことがないので、政道は公明正大、官吏の身分もきちんと整っていたのであるが、これはひとまずおくことにする。

さて、会稽郡の陽羨県に、姓は許、名は武、字を長文という人がいた。十五歳のとき両親がなくなり、すこしばかりの田地や奴僕は遺されたものの、身寄りもなく、誰も力になってくれるものはなかった。おまけに弟が二人いて、一人は許晏といって年はまだ九つ、もう一人は許普といってやっと七つになったばかり、どちらも何もわからぬ子供のことだから、一日じゅう兄さんにつきまとっては泣いている始末。

許武は、昼間は下僕たちの先に立って野良仕事をし、夜は灯火のもとで勉学にいそしんだ。それも、野良仕事のときには、まだ耕作のできない弟たちながら必ず傍で見ているようにさせ、勉学のときには、幼い二人の弟を机のわきに坐らせて、口ずから読みかたを教え、細かく意味を解きあかし、礼儀作法や人たるの道を教えこんだ。すこしでも教えに従わないようなことがあると、そのたびに位牌堂の前にひざまずいて、はげしく自らを責め、自分の徳がいたらぬために弟たちを教化することができない、父上母上の御霊がましますならばどうか弟たちをお導きくださるようにと、泣きつづけ、やがて弟たちが大声で泣いて詫びるとようやく身をおこすといったふうで、きつい言葉を吐いたり色をなしたりすることは決してなかった。部屋には蒲団をひと組だけ敷いて、兄弟三人がいっしょに寝ていた。

こうして数年たつと、二人の弟も大きくなり、家も次第に豊かになってきた。ある人が許武にお嫁さんをすすめると、許武は、

「もし妻をもらったら、二人の弟と別居しなければなりません。夫婦の愛にとらわれて兄弟の情を忘れるなどということは、わたしにはとてもできません」

そういうわけで、昼はみんなで田を耕し、夜はみんなで本を読む。食器もいっしょなら、寝床も必ずいっしょというありさま。これが郷里で大変な評判となり、みなは「孝悌許武」といってほめたたえた。また次のようなうたい文句が口々に伝わった。

陽羨県の許兄弟
夜昼ひまなく働き学び
弟二人を立派に育て
兄というより父と母

時の州と郡の長官は、ともにその評判を耳にし、推薦書を奉ったところ、朝廷では議郎（論議を司る官）として召しかえることになり、詔が会稽郡に下った。郡の太守は命を奉じて公文書を県令に下し、日を限って出発するよう勧告した。許武も君命とあっては拒むことも叶わず、二人の弟に、自分がいたときと同じように家で野良仕事や学問に精を出し、怠けたりして勤めを忘れ、亡き父の遺訓に背くようなことがあってはならぬといいきかせ、下僕たちには、みなそれぞれの本分をよく守り、二人の主人のいいつけをきいて、早起き早寝してともに家業を助けてくれるようにとたのんだ。いいおくことがすむと、旅支度をととのえたが、お上の車は使わずに、自分で人足を雇って車に乗り、小者を一人だけつれて、長安さして出発した。

日ならずして都につき、天子に拝謁して職をさずかったが、長安城

中では孝悌許武の名を聞いて、面識を求めようとするものが争って訪問した。すでに信望は官界に重きをなし、名声は四方にひろがっていたのである。朝廷の大官連の中には、許武がまだ独身だということを聞き出すと、ぜひ娘をやりたいと願う者も多かったが、許武は心の中で、

「自分たち兄弟は三人とももういい年だが、誰もまだ結婚していない。わたしだけが先に妻を娶るのは、いかにも兄としての道でない。まして自分の家は代々百姓をしながら学問をしたもの、それがしあわせにも朝廷にお役目を頂戴したからといって、さっそくご大家と婚姻関係を結んだりしたら、その娘は家柄を鼻にかけて、どうしても高慢ちきになる。それでは学者らしい質素な家風をぶちこわすだけでなく、他日二人の弟が貧乏人の娘と結婚でもしたとき、嫁同士の間がどうしてしっくりいこう。むかしから兄弟が不和になるのは、嫁が原因になることが多いのだから、自分はそうならぬようにしなくてはならない」

腹の中ではこう考えて尻ごみをしたが、口には出せないことなので、仕方なく、家に糟糠の妻がすでにきまっているから、それをやめて改めて結婚したら、宋弘に笑われるでしょうと、その都度適当にいい逃れをしていた。人々はそれを聞いて、ますます尊敬の念を深める。その上、許武は経学に精通していたので、朝廷に政治上の大事があって大臣たちでも決定を下すことができないようなときには、しばしば彼から助言を求めた。彼はむかしの例を引いて現在に当てはめ、その議論はことごとく核心をついていた。しかもそれは誰の目にも動かすべからざるものに見えたから、大臣たちはいよいよ彼をたのみにし、数年とたたぬうちに累進して御史大夫にまでなった。

ある日のこと、二人の弟が家で多年学問につとめながら、州や郡からの推薦がないところをみると、あるいは学業を放擲してだらしない生活をしているのではあるまいかと心配でたまらなくなり、家に帰って様子を見届けたいものと、ついに上奏文を奉った。その概略は、

臣菲才をもって聖代に遭逢し、位を通顕に致す。いまだ報称を謀らざるも、敢て暇逸を図らんや。古語に言えるあり、「人生百行、孝悌を先となす」「不孝に三あり、後なきを大となす」と。先父母早背すれども、域兆（墓地）いまだ修せず。臣が弟二人、学業いまだ立たず。臣三十にしていまだ娶らず。五倫の中、その二を欠く。願わくは臣に仮を賜い、暫く郷里に帰らしめられんことを。もし臣が犬馬の力にしてなお鞭笞すべきを念われなば、奔馳日あらん。

天子は上奏文をご覧になると、暇を取って帰省することをお許しになり、官用の駅馬車に乗り、錦を着て故郷に帰るよう命ぜられるとともに、黄金二十斤を婚礼の費用として賜わった。許武が皇恩を謝して宮中を退出すると、百官は郊外まで見送りに出かけた。まさに、

錦衣故里に帰るを報道すれば
争って誇る白屋（茅屋）公卿を出だすと

許武は郷里に帰って先祖の墓参りをすませると、さっそく辞令を返上し、病気を理由に、役人をやめることにした。暫くたってから、おもむろに二人の弟を呼びよせ、学業の進度をただしたところ、許晏も許普も答えによどみはなく、はっきり筋が通って言葉つきもきびきびしているので、許武は心中おおいに喜んだ。さらに家屋田畑の数をしらべてみると、以前より数倍も拡張されていて、すべて二人の弟の勤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

倹の結果であった。

許武はそこで郷里の良家の子女をあまねくたずねて、まず二人の弟の婚約をとりきめ、その上で自分が妻を娶り、つづいて弟たちに結婚させてやった。それから数ヵ月たってから、ふと二人の弟に向かってこういった。

「わたしは、兄弟というものは分家するのが道だときいている。わたしもお前たちももうみな結婚したし、田地財産もそれほど少なくはないから、それぞれ一戸を構えて差しつかえあるまい」

二人の弟に異存の筋はなかった。そこで日をえらんで酒席を用意した上、村じゅうの年寄りたちを招待し、杯もだいぶまわったところで、分家の件を披露した。そして召使たちをのこらず呼び集め、ありったけの家財を一つ一つ分けていった。まずいちばん広い家屋を自分の分として取って、

「わたしは高位についたから、門構えも張って格式をととのえなければならない。お前たちは百姓をやっているのだから、あばらやで十分だろう」

次は田地の帳簿をしらべて、良田という良田は全部自分のものにし、やせ地ばかりを弟たちにやって、

「わたしにはお客も多いし、交際も広くなるばかりだから、こうしないと費用が足りない。お前たちのほうは家族も少ないのだから、精を出して働きさえすれば、これでも飢えこごえることはあるまい。わたしは、お前たちに財産をたくさんもたせて、人間としての徳をそこなわせたくないのだ」

さて今度は、下男の中でも元気で利口なやつをのこらず取りこんで、

「わたしが出入りするときのお供には、こういうのがいないと物の役に立たない。お前たちは力を合わせて野良仕事をするのだから、そのばかな連中の手助けこそが必要で、これでみんな食うにはこと欠かないだろう。余計な人間は衣食のついえになるばかりだよ」

並みいる年寄りたちは、かねてから許武を孝悌の人と知っていたから、今度の財産分配でも、きっと遠慮してすこしで満足するだろうと思っていた。ところが、意外にも、何もかも自分ばかりがうまい汁を吸って、若い弟二人の取り分はその半分にもおよばない。謙譲の気持などはみじんもなく、まったく人をばかにしている。人々は心中はなはだ穏やかでない。まちがったことのきらいな何人かの老人は、むしゃくしゃしてたまらず、勝手に出ていってしまった。中に正直者で口の軽いのがいて、二人の弟の肩がもちたくて筋の通った話を一席弁じ立てようとしたが、別にまた考えぶかいのがいて、そっとその手や足をつねって口をふさがせたので、そのままになってしまった。そのロどめをした男にも、それなりの見識はあったのである。

「金や身分のある人は、身分の低い貧乏人とは腹の中もちがうものさ。許武も高官になったんだから、むかしのようなわけにはいかない。諺にもいってるだろう、『他人のことに口出しするな』ってな。俺たちはどうせ赤の他人、この家のことに口出しすることもあるまいじゃないか。たとえいいことをいってすすめてみたところで、聞いてくれるとは限らないし、無理に口をきいて、かえって兄弟を不仲にしてしまうおそれもある。もし弟のほうで兄貴に譲れば、これもまことに立派なことで、俺たちがそれにむかっ腹を立ててみたってはじまらないことだ。弟のほうが内心おもしろくなければ、きっと喧嘩になるから、そうなってから俺たちが口をきいてやったほうが、いいんじゃないかね」

これこそまさに、

事己れに干するに非ざれば多く管するを休めよ
話、機に投ぜざれば強いて言うこと莫かれ
（余計な口出ししないもの）

もともと許晏と許普は、兄の教えみちびきがあってこそ学問もおぼえ、礼儀もわきまえたもので、何事にも孝悌ということを旨としているから、兄からこのような分けかたをされても、理の当然と心得、不平の気持はこれっぽちもなかった。

許武の分配がすむと、人々はみな引き揚げていった。許武は真中の母屋に住み、その左右の小さな建物に許晏と許普がそれぞれ住んで、毎日下男をつれては野良仕事に出かけ、暇さえあれば書物を読み、時時わからないところがあれば兄のところへ聞きにいくのを常としていた。嫁同士の間も、兄弟三人にならって同じくなごやかである。しかし、それからというもの、村じゅうの年寄りたちは、誰もが許武の行為をいやしみ、二人の弟に同情して、ひそかに、

「許武はにせの孝廉で、許晏と許普こそがほんものの孝廉だ。二人は両親の手前を考えて、一心同体となって教えを守り、唯々諾々として決して逆らわない。これこそ孝というものではないか。それに二人は、義を重んじて財を軽んじ、分け前が多かろうと少なかろうと、ちっとも喧嘩などしない。これこそ廉というものではないか」

と取沙汰し、はじめ村につたわっていた「孝悌許武」という評判を、今は「武」の字を抹殺して「孝悌許家」というふうに改め、許晏と許普の評判をさかんに立てはじめた。漢朝は、公正な世論というものが非常に重んじられた時代なので、また次のようなうたい文句が世にひろまっていった。

にせ孝廉が役人さまで、ほんとの孝廉口銭（人頭税）払い。にせ孝廉が高殿に住み、ほんとの孝廉あばらや住まい。にせ孝廉は大地主、ほんとの孝廉は野良仕事。ほんものが玉なら、にせものは瓦。瓦は御殿にのぼっても、玉は野原に捨てられる。ほんものとんと芽が出ぬに、にせものだけがうまい汁。

時に明帝が御位につかれ、詔を下して賢者を求めたまい、学徳すぐれた人士があったら役人がその家を訪れて、礼をつくしてこれを迎え、駅車を仕立てて上京させるようにと命令された。詔書は会稽郡にも到着したので、郡の太守はこの旨を各県につたえた。県令はかねてから、許晏と許普が財産の分け前を譲ってちっとも争わなかったことを知っていたし、村の老人たちも、彼らこそほんとの孝廉で、その行ないは兄以上に立派であると公然と推薦してきたので、この二人のことを郡に報告した。郡の太守も州の長官もみな彼らの評判は日ごろから聞いているので、一致して推薦することになり、県令がみずからその家を訪れて、車をおりて面会を求め、黒繻子の反物五匹を引出物として差し出し、天子が賢者を求めておられる旨をつぶさに申しのべた。許晏と許普はしきりに辞退していたが、許武に、

「若いときに学んで、成人したらこれを実行にうつす、というのが君子の本分だ。お前たち、むやみに遠慮するものではない」

といわれて、やむなくお受けし、兄夫婦に別れをつげると、駅馬車に乗って長安におもむき、天子に拝謁した。拝謁の礼がすむと、天子が親しく、

「おんみらは、許武の弟か」

とご下問になったので、二人は平伏して、さようでございますとお答え申し上げる。つづいてまた、

「おんみらの家は孝悌の評判が高いが、おんみらの廉譲の行ないは兄にまさるものがあると聞き、朕は満足に思うぞ」

との仰せに、晏と普は平伏して、

「聖運さかんにして、あまねく天下の人士をお求めあそばすは、まことに帝王の盛典と存じあげまするが、わが郡県にてわれら両名を不肖としなかったことは、陛下のお耳をけがすものかと存じます。われらは幼くして父母を失い、兄武の教訓のもとに、兢兢として自らを守り、耕耘しつつ書物を読みならった以外には、これといって取柄のない者、兄武の万分の一にもおよびません」

天子はその答えを聞いて彼らの謙譲の徳を嘉され、即日二人とも内史（首都近辺の長官）の職をさずけられた。そして五年とたたぬうちに九卿の位にまで進んだ。任官してからの名声は兄のはなやかさにはおよばなかったが、廷臣たちは一人のこらずその廉譲ぶりをたたえていた。

そうしたある日のこと、兄の許武から二人の弟にあてた手紙がとどいた。あけてみると、次のようなことが書いてあった。

匹夫にして辟召を受け、仕官して九卿にまで至ったのも、まことに人生栄華の極である。二疏の言に、「足るを知れば辱しめられず、止まるを知れば殆からず」とある。人より傑出した才能がないからには、宜しく機を見て勇退し、賢者に道を譲るべきであろう。

晏と普は、手紙を受け取ったその日のうちに、辞表を奉ったが、天子はお許しにならない。それが三度も重なったので、天子は宰相の宋均におたずねになった。

「許晏と許普は壮年で仕官し、位も九卿にまでのぼって、朕も彼らをわるく扱ってはいないはずなのに、しばしば退職を願い出るのは、なぜであろう」

「彼ら兄弟三人は、生まれつき仲がよいのでございます。ところが、許武は永らく郷里に隠棲しておりますのに、晏と普の二人だけが朝廷の要路におりますので、あるいは気持が落ちつかぬのかも知れません」

「許武もともに召し出して、兄弟三人いっしょに朝廷で政治を輔佐させたらどうであろうな」

「臣が察しまするに、晏・普の気持は誠より出ているものと思われますので、陛下におかれましても、ここはひとまず彼らの願いどおりにその高志を遂げさせておやりになり、他日改めて詔を下してお召しになるか、あるいは先朝の故事にならって、最寄りの大きな郡をあたえて彼らの内に蓄えている才能を存分に発揮できるようにしてやるかして、帰省の便宜をはかっておやりになるがよろしゅうございましょう。さすれば、陛下が賢者を愛される御心も、晏と普の兄思いの気持も、ふたつながら叶えられるというものでございます」

天子は宰相の言葉をお取り上げになり、さっそく許晏を丹陽郡の太守に、許普を呉郡の太守に任命され、それぞれに黄金二十斤を賜わり、三ヵ月の休暇をゆるして兄弟の情を尽くさせることになさった。許晏と許普が天恩を謝して朝廷にいとまをつげると、公卿たちは総出で郊外十里の長亭まで見送りをし、たがいに礼をかわして別れた。

晏と普の二人は夜を日についで陽羨に立ち帰ると、兄に対面して、朝廷から頂戴した黄金をのこらず差し出したが、許武は、

「これは陛下からの賜わりもの、わたしのあずかり知るところでない」

と、二人の弟にそれぞれ収めさせた。

あくる日、許武はお供えの肉を用意し、二人の弟をつれて父母の墓にお参りをした。それがすむと、すぐさま宴席を設けて村じゅうの父老をのこらず招待した。許家では兄弟が三人とも大官になり、別に富貴を鼻にかけたりしないとはいうものの、おのずとその評判や威勢はひびきわたっているから、お呼びと聞いて、来ない者のあるはずはない。まして「請」の字のついた招待だから、父老たちはひとりのこらず顔をそろえた。

許武が杯をとって、みずから酒をすすめるので、人々は口をそろえて、

「長文公が二旦那と三旦那のために催された歓迎会のお酒を、わたしどもがお先に頂戴するなんてわけにはまいりません」

そのころは風俗が淳朴で、村の人々は官爵の高下よりも年齢の大小に序列をおいていた。許武はもうずっと前に仕官しているので、やはり「長文公」というふうに呼び、二人の弟は年がひとまわり下だから、たとえ九卿の高位についたとはいえ、土地ではしきたりを重んじて、今までどおり「旦那」と呼んだのである。

すると許武は、

「わたくしはまことに失礼ながら、みなさんの上座についておりますが、実はここに心から申し上げたいことがあるのです。どうぞまず、なみなみと三杯召し上がってください、そのあとでお話しいたします」

人々はすすめられて、順番に飲みほした。許武は二人の弟にも、順次杯をとって一杯ずつ献じた。飲み終わると、人々は声をそろえて、

「わたしどもも、ご兄弟のご厚情に甘えさせていただいて、人の牛蒡で法事するとか申しますが、一献差させてください」

許武ら三人もそれぞれ飲みほした。そこで人々は、

「さきほど長文公がお洩らしになった大事なお話、一同耳をほじって待ちかねております。どうぞお聞かせなすってください」

許武は両手の指をかさねて語り出したが、まだ話も序の口というのに、聞いている人たちをぞっとさせてしまった。これぞまさに、

斥鷃（小鳥の名）は大鵬（大鳥の名）を知らず

錦を衣て故里に帰る

河伯（河の神）は海若（海の神）を知らず（『荘子』に見える）
聖賢の一段の苦心
庸夫あに能く測度せんや

許武はそのとき、話をはじめる前に、まずはらはらと涙をこぼした。人々はびっくりしたが、おろおろしてどうにもできない。二人の弟が急ぎひざまずいて、

「兄さん、何がそんなに悲しいのですか」

とたずねると、許武は、

「わたしはこのことを、数年の間、じっと胸に秘めてきたのだが、今日こそはいわずにはいられない」

と、晏と普を指さしながら、

「実は、お前たち二人が出世していなかったばっかりに、わたしは心にもないことをして、世間から評判を立てられ、ご先祖の名前までけがし、郷里の笑いものになってしまったのだ。それが悲しいのだよ」

そこで一冊の帳簿を取り出して、みんなに見せた。それは、田地家屋や、毎年あがる米穀や布帛の数量を記したものであったが、人々にはまだその意味がわからない。許武は言葉をつづけて、

「わたしがむかし、二人の弟を教育したのは、弟たちが身を立て道を行ない、名を揚げ親をあらわすというふうになってくれることを願ってのことでした。ところが、わたしのほうは早くから不当な名声を博し、先に出世してしまったのに、弟たちは家で耕作しつつ学問にはげんでも、いっこうに州郡のお召しにあずかれない。わたしは、むかしの祁大夫が、肉親でも遠慮せずに推薦したという例にならおうかと思いましたが、それでは弟たちの学徳を知らぬ者たちから、兄のお蔭で仕官したなどといわれ、生涯の名節をあやまることになるかも知れない。そこでわたしは、わざと分家の相談を持ち出し、大きな家や肥えた田、丈夫で利口な下男下女などを、のこらず自分のものにしてしまいました。弟たちはもともと敬愛の念にあついから、決して喧嘩にはなるまい。わたしが当分のあいだ強欲なふるまいをしてみせれば、弟たちはきっと廉譲の評判を得るだろうと、こう考えた次第です。はたせるかな、村じゅうでの評判になり、栄えあるお召しを受ける身となりました。今では大臣にまでなって、お役目に落度もなく、わたしの志もこれで叶ったというものです。この家屋敷、田畑、奴婢などは、すべて共同の物ですから、わたしがひとり占めにするわけにはいきません。ここ数年来、あがった米穀や布帛は、すこしも勝手には使わず、のこらずその帳簿に記載してあります。今日はこれを二人の弟にわたして、兄としてのこれまでの心のたけを示すとともに、郷党のみなさんにもお知らせしたわけなのです」

父老たちは、これではじめて、先年の財産分けのときの許武の苦心のほどを知り、見識が低くてそこまで読みとることができなかった自分たちを恥ずかしく思い、しばらくの間は、口々にほめちぎっていた。許晏と許普の二人だけはその場に泣き伏して、

「わたしたちは兄さんの薫陶を受けて成人し、しあわせにも今日あるを得ましたが、兄さんがそれほどまでに心を配ってくださったとは、夢にも知りませんでした。これもわたしたちの不肖のゆえで、自力では出世することもできず、兄さんにご迷惑をかけてしまったのです。今日もし兄さんがうち明けてくださらなかったら、わたしたちには皆目わからないところでした。兄さんのような徳の高い人は、むかしからひとりだっていなかったでしょう。それにしても、わたしたちの不肖の罪は、到底つぐなうことはできません。このすこしばかりの財産も、もとはといえば兄さんが苦労して稼がれたものですから、どうぞ

兄さんが管理してください。わたしたちも衣食には事欠きませんから、兄さんのご心配はご無用です」

というと、許武は、

「わたしは長年、野良仕事につとめてきたから、生産のことはよく知っている。それにもう役人をしようという気もうすれたから、年をとるまで鋤鍬を取って、天寿を全うするつもりだ。お前たちは年も若く体力もあるのだから、地方官として立派な政治を行ない、村々を豊かにして、廉節の名を全うしてくれ」

「兄さんがわたしたちのためにみずから汚名を受けてくださったのに、弟たちが名声を得た上にさらに利益をむさぼったりしたら、これは天下第一の欲ばりというものです。それではご先祖の名にきずをつけるばかりでなく、兄さんの顔にも泥をぬることになってしまいます。何としてもその帳簿をお収めになって、わたしたちの罪をすこしでも軽くしてください」

と、晏と普がいう。父老たちは、彼ら兄弟三人がたがいに譲りあって、そちらで収めなければこちらも受け取らない、といった具合なので、そろって進み出て口を入れた。

「ご兄弟のおっしゃること、すべて道理は一つです。長文公がもしこの財産をひとりでお取りになれば、弟さんがたを立派に仕上げられたこれまでのご苦心が水の泡になるし、お二方がおめおめとお受け取りになれば、これも令兄長文公の積もるご好意に背くことになります。わたしども年寄りの考えでは、これを三等分なさって、多い少ないの差別のないようにしてこそ、兄弟たがいに敬愛しあう気持も示され、それぞれの道を尽くしたことになるではありませんか」

三人がなおも譲りあっているので、年寄りたちのうち、いつぞやの折のきかん気の一徹者が何人か、ずいと身を乗り出して、声を荒げていった。

「わたしどもの今いった処置は、まったく公平なものです。もしこれ以上辞退をなさると、わざとらしい売名ということになってしまいますぞ。さあその帳簿をおよこしなさい、わたしどもが分けて差し上げるから」

許武ら兄弟三人も、もうそれ以上はつべこべいわず、老人たちのいうがままになるより仕方がなかった。その場で田畑は三つに按分され、三人でそれぞれ管理することになった。真中の大きな家屋は、今までどおり許武の住居とし、左右の建物は手狭なので、ありあわせの穀物や布帛で補っておき、晏と普がいずれ自分で改造することにした。召使たちもみなそれぞれへ割り当てられた。父老たちも、これは公平だと賛成してくれたので、許武ら三人は贈りものをして礼を述べたのち、正式の座に案内して酒宴となり、一同歓を尽くして散会した。

許武の心の中には、いつも前の財産分けのことがひっかかりになってならなかったので、自分のものになった良田の半分を、貧者救済の公田として提供し、郷里の役に立てようと考えた。許晏と許普もそれと知ると、それぞれ自分の財産を出してこれを助けた。村の人々はみな感服して、また次のようなうたい文句を口々に語りつたえた。

ほんとの孝廉、それは許武。お次は誰か、晏と普。弟すなおで、兄欲ばらず。公田つくって、郷里の人助け。ああこの孝廉、並ぶ者なし。

晏と普は、兄の義理に感じて、朝廷からいただいた黄金で酒や肉をたくさん買いととのえ、毎日のように村の父老をよんでは兄といっしょに飲んでいた。そうこうするうちに三月たって、休暇の期限がやっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com